東南アジア民族服についての考察（第1報）

Java の民族服

池田初子

Consideration of Folk Costume in Southeastern-Asia (Part 1)

Costume of Java

by

Hatsuko IKEDA

まえがき

東南アジア各国の民族服を総体的に考察する場合，それらに関する資料文献，古美術，遺蹟に散見する風俗および現地衣服の形式から，ヨーロッパとは異質な東南アジア独特の形態美を持つことに気付く．その主たる形式である巻き合せの下衣は，明らかに原始衣服の形態が残存するものと思われる．その源をたずね，それを類推することはきわめて困難である．衣服の伝統としての東洋美の真髄に触れることは，東洋人の生活様式に密着した衣服の構造と服装美の創造への一助ともなり，ひいては衣生活における伝統美の存続に役立つと考えられる．

今日，それぞれの分野の造型面で東洋美の追求がなされているが，単に外面のみをとらえるのではなく深くこれを探求する必要がある．そこで日本と，地理的，歴史的にきわめて関係が深いと思われる Java (Indonesia) の民族服に着目し，下記の資料をもとにして2，3の考察をこころみたので，それについて報告する．

研究資料

- 1964年 Bandung より研修のため来名した Soemarlan 氏より寄贈された Batik 1点．
- 1964年 Djakarta より研修のため来名された Goernawan Ranadireksa 氏より寄贈された Batik 1点．
- Bandung 在住の水野逸郎氏の寄贈による現代 Java 婦人の服装1点，Sunda 婦人の服装1点，Sumatra の衣服1点，室内装飾品3点，写真120枚，Java 音楽録音テープ1巻およびレポート．

購入したもの

- Sala 王宮王女，侍女の服装3点．
- Pekalongan（中部 Java）産現代の服装 1点．
- Lorik 織り物の Kain 1点．
- Batik 用染色用具一式，鍋，蝋，チャンチン．
- Motief Batik 国立バテイック研究所刊．
- 国内資料としては日本繊維意匠センターより図書の寄贈を受け，同所資料室で資料の閲覧を許された．

上記の資料をもとにして構造，材質，色彩，意匠，形態，様式の観察をした．なお，衣服の形式については，地理的条件と形の発達段階を調査し，習慣も合せて日本との近似点について比較するとともに，共通の美にふれることにした．

Indonesia は，1949年の独立宣言以前は，外国政治の支配下に置かれ外来文化の混合のなかで，その影響を受けながらも固有の文化が存続してきた．このことはオランダの植民政策が原住民の風俗習慣を変えず維持し，社会制度や文化の研究をしようとした政策によったものと考えられる．今なお土着文化が，滅びず伝承されている点を重視し，衰退しつつあるアジア民族服が持つ共通の固有美を再認識することが肝要ではないだろうか．さらに今後は東南アジア地域の他の国々についても，これをもととして類推し，その展開を試みたい．

Java における民族服の背景

Java における民族服の背景となっているものは，地理的，歴史的，気候的な諸要因がこれをなすものと考えられる．それらの研究をするため必要な条件にふれてみて，まず地理概要と気候について述べてみよう．

a. 地 理 と 気 候

Java は東径 105°11′〜114°33′ 南緯 5°52′〜8°46′ に位置する．その地形はスンダ台地に属し，生物地理学的にはウォーレス線以西の東洋区に近い地域にあり，古代ではユーラシア大陸の南東部であったといわれている．アジア大陸と陸地接続していた時代から，現在の島嶼が形成されるまで，民族の移動は生物の分布からもある程度類推される．

最近，インドネシア近海の調査におもむいたバルーナ探検隊も，海底の生物が日本近海の熱帯地域とまったく同質であることを報告している．また，ジャワ原人と北京猿人の類似が Weidenreich 博士による，最近の研究で明らかとなった点からみても，衣服は民族とともに移動，南下したと推測されることなどから同じ系統の衣服の発祥も考えられる．夏期ジャワ海を流れる海流がバシー海峡に至り，北上して黒潮に合流するという潮流の関係からも人種の伝播が考えられる．このことについては，古書にみられる漂流記がその裏ずけとなる．これらの記録をあげると次のものがある．

1. 西紀 654年　皇徳天皇白雉5年，吐火羅人，男2人，女2人（ジャワ人）舎衛人（ヴイシャ人）女1人，日向に漂着．
2. 657年　斉明天皇3年，吐火羅人漂着．
3. 659年　斉明天皇5年，吐火羅人漂着．
4. 734年　聖武天皇天平6年，日本遣唐使，崑崙国（旧ボルネオ現カリマンタン）に漂着．
5. 799年　桓武天皇延暦18年，崑崙人，三河の国に漂着．その風俗，布を以て背を覆う．犢鼻あり，袴を着せず左肩に紺布を着す，形袈裟に似たり，年廿ばかり，身長5尺5寸——日本後紀，巻三十一，七月の条．
6. 1172年　平清盛による日宋貿易が季節風利用でなされた．日本→宋，3，4月東北の季節風．宋→日本，5，6月頃西南季節風．
7. 1350年以後　八幡船，1592年以後，御朱印船による交流．
8. 1632年　JAVA 在留日本人の数，男48人，女24人，児童11人，奴隷25人，計108人．（村上直次郎博士—「ジャガタラの日本人」—）—旧台北帝国大学文政学部史学科研究年報1— 註，Batavia を 1527年 Djakerta と改名，日本ではジャガタラと称した．

Plete 1.

1. ジャワスタイル
2. 旧ソロ王宮における王女の服装
3. 手織りの服装
4. ソロ王族の王女（15才未満）の服装
5. ソロ王族の侍女の服装
6. 現在の一般人プカロンガン地方の服装
7. スンダスタイル
8. スンダ族の座り方（emok）
9. ジャワ族の座り方
10. ボロブドール寺院の全景
11. 現在の中学生の服装
12. Sabuk wolo という子供服
13. ボロブドール寺院のツシ

9.　　1636年　鎖国令により帰国できずそのまま帰化したものと思われる．当時日本人町が各移住地でつくられていた史実がある．

以上は歴史に残る著名な事実である．

Java の国名については，僧法顕の仏国記に「耶婆提」，唐書では「社婆」」，宋史には「闍婆」，元史には「闍婆」，「爪哇」，明史は「爪哇」と記されている．

人種は BC 2,500頃アジア大陸より移住した原蒙古族系に IC 頃インド人が東インド諸島に進出した後印度から西部 Java に Sunda 族，中部 Java に Java 族，東部 Java に Madoera 族が定住したといわれる．その後に前印度方面から Hindoe 族が入ってきて，仏教，ヒンドウ教，バラモン教を伝え，Javadwipa（米の島）と名付けたという説がある．

気温は高渇多湿の熱帯海洋性気候であるから，北部平地の平均気温は 26.6℃ であり，高地 Bandong で 22.25℃，東部 Tosari で 16.2℃ である．12月～3月が南東風の乾期であり，12月～3月までは南風の雨期となる．従って衣料の素材は綿が最適であり，高地では毛織物も必要である．化学繊維なる，吸湿・通気退色などを考慮しなければならないと思う．

b.　美術について

東南アジアの文化は，半島地域と島嶼地域にわけて考える必要があり，Java は，とくに Indonesia において芸術の水準の高いことを知られているが，とくに Djakarta Bandang Jogjakarta は美術の中心地となっている．多種文化の影響を受けているが，世界に伝統を誇る Batik にみられる固有の技術と，意匠美は，その源が印度であったとしても Java の風土，自然を母胎として民族の芸術的資質が開花，結実したのではないだろうか．舞踊の仮面にみられる造型性，模様の便化，染色の技術，手紅工の巧緻さなど，芸術的な創造力と，優れた美的感覚を持つ民族であることがうかがい知れる．

仏教寺院として著名な Tjandi Borobodur（8C）ヒンドウ教の古蹟である Prambanan などは優れた石彫であるばかりでなく，当時の風俗を知る好材料といえる．(Figs. 10, 13)

絵画の傾向は民族固有の芸術と，ユーラシア芸術の2つの伝統があり，後者の祖といわれる Raden Saleh (1816—1880) は偉大な画家として尊敬されている．

1938年には芸術家協会がつくられた．また1950年8月に人民文化連盟ができ，Affandi (1910) が指導的立場で活躍した．

1952年 PeLvkis Indonesia Muda インドネシア青年協会が Widajat 氏によって結成された．Widajat 氏は Jogjakalta の Academy of Fin Art Indonesia の美術講師で，1961年2月 Indonesia 政府の派遣で来日，瀬戸，東京に在住，個展を数回開いた．その作風はプリミティーブで躍動的な構図と熱帯的な色調による生命力の溢れるような個性的な画面であった．民族芸術とユーラシア風な混合であるかと思われる．画題には主としてラマヤナ劇および Java の生活が扱われていた．

民族服の史的概観

民族服の背景となる諸条件から推測して，民族の移動とともに衣服の伝播があったと考えられるので関係のある地域の民族服の特徴をあげてみると (Fig. 10) 現在の民族服からは，印度中国の様式に後から導入されたヨーロッパ的な形が混然となっていると思われる．Batik の巻き合せ形式は印度の Sari，肩に掛ける Sulendang は Sari の両端を肩に掛けている習慣の名残りではなかろうか．

上衣である Kabaja はオランダの影響か．日本の伊達じめという帯下の巾の狭い帯とまった

く同形のものを Batik の上からしめ，その上から，絞りの丁度日本の子供の三尺帯（兵庫帯）のような飾り布を上帯として巻きつける．帯は日本独自のものと考えられるので，印度・中国ともにあまり用いられない点から考えると，日本人の移民とともに移入したものではないかという疑問が残されるのである．

魏志「倭人伝」は日本の3世紀頃の風俗の見聞記といわれるが，その中にある横巾布という下衣は明かに Kain 形式である．印度人の東南アジア進出が1紀世頃といわれているから，その当時ヒンドゥ族が移住していたとすれば，日本への移住もあったのではないかと推測される．「倭人伝」に記載されている「ヤマタイ」国の所在がいまだに明かにされていない点からみて，あるいは，日本以南のどこかの島ではなかったか．若し日本だとすればあまりに南方的な風俗ではある．

昭和初期の Java 日報によると，低地域（高温）の庶民は Salon で胸を覆い，肩は露出していた．その後文化の近代化につれてヨーロッパの影響をうけ，ブラウス風な kavaja という薄布の上衣を着るようになった．胸の合わせ目を安全ピンで留めていると報じている．

SaLa 王宮内の労働する階級は男女ともに上半身は覆わない．写真に示したように王族との身分の差を現わしている．

現在では禁制の模様も自由に使用されて衣服による格差はつけられていない．(Pl. 1, fs. 2, 4, 5), (Figs. 8, 9).

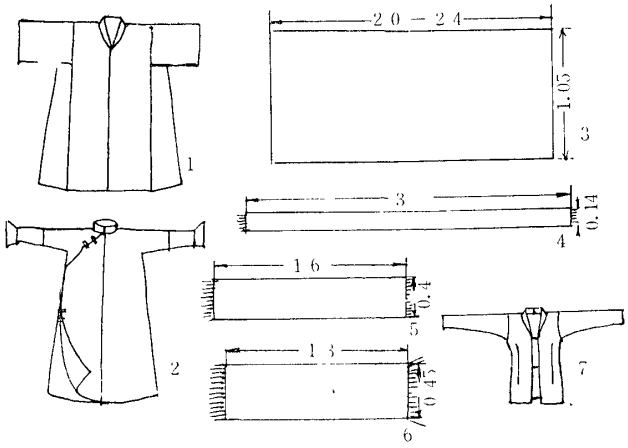

Fig. 1. Turkestah. 婦人用衣裳.
Fig. 2. Mongolia. 〃
Fig. 3. Batik
Fig. 4. Stagen
Figs. 5, 6. Selehdang
Fig. 7. Kabaja
} Indonesia.

Fig. 8. Java 儀式用（男性）.
Fig. 9. Java 山地.
Fig. 10. Hindo 婦人.

Java の民族服の様式

Java に住む Java 族 Sunda 族の服装の各々の特徴についてあげてみると，

a. Java 族の現代着用する民族服

Batik Lererg	刀の斜蛇行模様ローケツ染 Palan Lusak という．
Kabaja	上衣，ナイロン・レース．
Selendang	肩掛，ローケツ染．
Kemben	絞りの飾り帯．

Stagen　　下じめの帯.

Java 族に限り kavaja の前あきの個所に ger と称する胸当がつく．また，Beb という折り返る衿がつく．

Selendang は従来未婚者が左，既婚者が右に掛ける習慣があったが，現在は自由である．

Sabuk Wolo は子供の日常着，20〜30年前は着用されたが，最近はヨーロッパスタイルになったのであまり見かけられない．

b. Sunda 族の様式

Batik は Terang Bulun という．主として Sunda 族のみが用いた．過去には両種族の差を着衣の上ではっきりさせるために混用しなかったが，現在ではそれにとらわれない．写真は儀式用で Batik はローケツ染の感じを捺染したものである．

中部 Java はプリント製品の研究が盛んである．色は濃紺に赤とピンクと緑が使用されている．

Sunda 族の Kabaja は Java 族と異なり，上衣の裾まで前があかないように着用する．

c. Sala 王宮王女の衣裳

Surakalta の主都 Sala では，Susuhunan（宇宙の柱）の尊称で選ばれた Java 人の王族が統御していた．王宮は一般の参観が許され，今では王家は政治の実権を持たない．

士族は刀を腰にさし，その階級を傘の色で現わす．

Djogjaklta にも王家があり，いずれも Batik の特産地として知らられる．

d. 農村の衣服

Pakaian Lurik, Kabaja, Angkin, Kain すべて手織り (Lurik), Slendang, Lurik は以前農婦の服装であったが，現在では一般化されている．

以上が Java の代表的なスタイルである．日本の和服と同様に巻き合せの裾さばきの点，帯の圧迫感などの非機能性が指適され日常着として，衰退してゆく主な原因といえる　彼我ともに現代生活では儀式，社交服として存続するものと思われる．その服装美については，日本は静的な優美さを持ち，模様も植物的で内向的な感覚を持つ．Java は熱帯植物や動物の保護色にみられるような強烈な色調．模様の構成はダイナミックな図柄で，動的な感覚を持つ．そのように風土性による異った感覚美を持つが，形態においてとくに腰から裾までの線は非常に似通っている．いずれも直線的な形の上に身体のきが与える固定しないドレープの美しさこそ，これらの衣服の美の共通点ではないかと考えられる．試みに現地のひとりの女性がヨーロッパスタイルと足首までの衣服を交互に着用した写真で比較してみると，明かに東洋的プロポーションには民族服の方が優美な感覚と着装の均衡美を持つことがわかる．(Fig. 11. のモデルと Figs. 2, 3, 4, 5, 6 は同一人物)

ま　と　め

最後に Java と日本における服飾の類似点を概括的にみると，Sala 王宮の王女の使用する櫛は日本髪の前ざしとそれとまったく同様である．これは中国風なものと思われる．Java のカウン模様は日本の七宝つなぎと似ている．これは印度から伝来したものとみなされる．

また，Batik の点描法は江戸小紋と近似している．これは琉球紅型との相似も指摘されていて，これらについての考察はなお資料を得たうえ，次回にまとめることとし，今回は概観についての記述にとどめた．ここに掲載した資料は Bandun 在住の水野逸郎氏により得たものである．

本研究の展開により東洋的な，服装美を現代服に，その固有美をどう結びつけるかが今後の課題である．

最後にこの研究を行なうにあたりご指導をいただいた本学福島フミ教授，ご協力頂いた佐藤正孝助手，水野逸郎氏に衷心より感謝を捧げる．

参 考 文 献

北村哲郎編集：1959，インド東南アジア染色図録

板沢武雄著：　昔の南洋と日本

舟越康寿著：1943，東南アジア文化圏史

爪哇月報社著：　爪　哇

守田公夫著：　日本被服文化史

世界美術大系：1964，インドネシア美術

松本信広著：1943，印度支那の民族文化

Anandak Coomaraswamy：1964，Grolier Incorporated History of Indian and Indonesian Art, Lands and Peoples.

Max Tilke：1956，Costume Patterne and Designs

Americana　Ensyclopedia Americana

日本繊維意匠センター編：1960，バテイック，東南アジアの繊維意匠

京都書院：1959，南方染色図録，ジャワ更紗

斉藤正雄著：1942，東印度の文化

C. H. シュトラック：1953，女体美大系　―女体の人種美―

Balai Penelitian Batik Jogjakarta：1964，Motief Batik